# キリスト教倫理における直説法と命令法

名木田　　薫
岡山理科大学教養部

（1990年9月30日　受理）

## (一)

概略的に言えば，自我の崩壊までは結果的にはそこへ至るためにできるだけ「人々からしてほしいと望むことは，人々にもそのようにせよ」（Mt 7 : 12）ということを実行することがいわば倫理となる。こういう実行によって人の心はこの世への執着から少しづつ離れてゆく。そしてそこまで至った後では霊の場にあるので霊の実行が倫理となる。そこへの過程では，いわば試練こそ人をこの世から呼び出し，超越界へと人を呼ぶものである。「自分を低くする者が，天国で一番偉いのである」（Mt18 : 4）とも言われる。人は試練へと呼び込まれることにより次第に背が低くなってゆく。米粒よりも小さくなり，更には肉眼では見えなくなってしまう。そして遂には消えてなくなる。この時初めて生命の泉がわきでてくる。これはもはや人の生命がもえている泉ではなくて，果てしなく続くところの永遠の泉である。

さて，キリストと共に死につつあるというのは現実のことである。一方，キリストと共に甦ったということは単なる比喩ではないが，比喩でもある。比喩を先取りして現実を後回しにしてはいけない。そのようなことをすると現実の方が空洞化してしまう。甦ったという比喩の内容は死につつあるという現実を離れてはないのである。そこで“死んだ”というのも厳密には現実ではない。そういう訳で甦ったということのみでなく死んだというのも比喩とも言える。死につつあるというのが現実である。かくて結局キリストと共に死んで，更に死につつあるということである。一回的に死んで初めて日々死ぬことができることになる。「イエスのために絶えず死に渡されている」（2 Kor 4 : 11）とパウロは言う。換言すればキリスト者は世から捨てられた人という意味での世捨人である。しかし正確にはむしろキリスト教“的”世界から捨てられた人ということかもしれない。“的”というところが問題であろう。こういう意味では世から捨てられても世を捨てぬ人がキリスト者ということになるかもしれない。世から捨てられても，すぐに世を捨ててしまうことはしないのである。元来，世とはキリスト信仰をうけ入れない世界との意であろう。そこで一般の世はキリスト信仰を伝えられていないので，うけ入れる，入れないという問の前に立たされていない世なのである。伝えられて初めて世というものも生まれるのである。したがって伝えられていない世は元来世とも言えないところであろう。そこでもし裁きが

あるとすれば，キリスト信仰界の内にいる人々に対してであって外に対しては何ら無関係のことであろう。こういう点からみるとローマ時代の迫害にしろ，それに加担した人々がもし信仰界外の人々なら責任は問えないであろう。何をしているか分っていないのであるから。内にいてしかも迫害に加担すれば，その意味を分りつつそうしているのだから，ここに責任が生じるであろう。

パウロは「絶えず死に渡されている」（2 Kor 4 ：11）と言うが，毎日が彼にとっては殉教なのである。そういう現実的状況の中にこそ，“神”秘ならざる“キリスト”秘というものも芽生えてきている。そういう苦しみ――単なる苦しみではもはやないが――の中にこそパウロにとっての救いが存している。主のために滅びることが実は彼にとっては救いである。ただ一人の主人に仕えることの内に救いがある。人がただ人として救われることに彼にとっての救いがあったのではなかったであろう。これではまだ自己の方へ目が向けられている。そういう目が他者の方へ向けられる。ここに彼の救いがある。回心とは目を自己から他者へと向けることでもある。律法精進の時には，自己の目は自己へ向けられている。回心後はキリストの方へ向けられている。この目の向け所の転換が大切である。自己の救いのためということがあってはたとえ他者へと目が向けられても不可である。自己の救いのことはうち忘れて他者へ目が向けられて初めて救いとなる。毎日が殉教，更に言えば一挙手，一投足全てが殉教の営みである。だからこそパウロは「生きることはキリストであり」（Phil 1 ：21）と言いうるのである，生イコール殉教である。彼にとっては生きることは，即ち死ぬことである。キリストは十字架の死をとげたのであるから，死における共同があって初めて生きることはキリストであると言いうるのであろう。ここでのキリストとは十字架に至るまで従順であったキリストのことが，彼の頭の中では描かれていると思う。したがってパウロにとっては，生きることはキリストであると言っても，死ぬことはキリストであると言っても所詮同じことを意味するにすぎないであろう。なぜならば彼にとっては生きることは死ぬことであるから。内容的に死ぬことを抜きにした生きることはもはや彼にとってはありえないことであるから。かくて「生きることはキリストであり，死ぬことは益である」（Phil 1 ：21）とは，死ぬことはキリストであり，死ぬことは益であるということにもなる。同語反復の如くにも聞こえるわけである。死ぬことを日々の死，日々の殉教と考えてもよいし，文字通りの一回的な死のことと考えてもよいであろう。キリストはパウロにとっては死ぬことが生きることであることの代名詞の如きものである。シンボルである。したがってまた「生きることはキリストであり，死ぬことは益である」とは，キリストとは死ぬことであるとの意味でもあるから，そこで生きることは死ぬことであり，死ぬことは益であるという意味にもなるのである。「あなたのまくものは，死ななければ，生かされないではないか」（1 Kor15 : 36）とパウロは言っている。だからまくのである。つまり死ぬのである。「生きるにも死ぬにも，わたしの身によってキリストがあがめられることである」（Phil 1 ：20）という言葉によって分ることは，キリス

トがあがめられるという目的によって自己の生と死との区分はもはや消滅しているという事実である。「わたしは日々死んでいるのである」（1 Kor15：31）と言っている。先述の如く「生きることはキリストであり」とは，生きることは死ぬことであるとの意である。そしてこのような心情を更に押し進めてゆくと「死ぬことは益である」ということになる。なぜならば死ぬことは文字通りキリストに今以上に近づくことになるからである。つまりこのような言葉の背後ではキリストへ近づくことが思われているのである。このことは，「その死の様に等しくなるなら，さらに彼の復活の様にも等しくなるであろう」（Röm 6：5）と言われることからも分るであろう。復活はあくまで死んだ後でのことであって，この世に生きている限り死ぬこと以外パウロの頭にはないことであろう。復活の生のことはあくまで将来の希望の対象でしかない。しかもこの世で死を望むのでない限りそういうことを希望する資格もないのである。

また「死ぬことは益である」と言いうるのは，キリストと死後あいまみえるという希望があってのことではないかと思われる。そのような何か積極的なものがあってこそそのように言いえたのであろうと思われる。しかしこの言葉はパウロがとらわれの身の状況にあって言っている点も考える必要があろう。しかしいずれにしろ現世に少しの執着もないことが前提である。その上で本来の活動がとらわれの身ゆえにできないので，死が益であると思ったのであろう。現世での居心地がよいのでは，このようなことは思えようはずもないであろう。もし自由の身で伝道活動が存分にできていれば，このようなことは或は言わなかったでもあろう。このことはすぐ次に「肉体において生きていることが，わたしにとっては実り多い働きになるのだとすれば，どちらを選んだらよいか，わたしには分らない」（Phil 1：22）と言っていることでも分る。これに対して「生きることはキリストであり」ということは全的真理であろう。キリストの苦しみの足りぬところを補う（Kol 1：24）ということに通じている。つまり生きること，伝道することは日々死に渡されることだからこのように言っているのである。

## (二)

このような問題において大切なことの一つは人の肉体性のことである。このことの重要性は Röm12：1，1 Kor 6：20 によっても分る。地上での生にとって肉体は不可欠のモメントである。そしてこれがあるゆえに人は肉の方へ引かれてゆく，たとえ肉体が直ちに肉の意ではないとしてもである。霊肉の争い，人がそのどちらに従って生きるかの選択が生じてくる（Röm 8：13)。Röm 6：12で「死すべきからだを……情欲に従わせることをせず」というが，すでに罪に対して死んでいても，からだがからだである以上は罪の支配にゆだねられてしまう危険のあることを示している。このことは Röm 7：7 ff を見ても分るように，パウロ自身のからだについても言いうることであろうと思う。ここに「自分のからだを打ちたたいて服従させるのである（1 Kor 9：27）ということの意味がある。

かくて人の実存のあり方は，罪に対して死ぬ以前，罪に対して死んだがいわゆる命令法の生きている状況，霊のからだが与えられた以後の三期に分けて考えることもできよう。

さて，このような状況にあるキリスト者に対して世は常に誘惑を続ける。だからこそキリスト者は罪に対して目ざめているようにとの戒めを必要としている。かくて倫理的命令は状況に関連してもいる[1]。尤も霊のからだの付与までは人はどこまでもからだ自体の中にRöm 7の示す如く罪に傾く要素をもっている。したがって単に状況に関連しているとは言えないであろう。福音を信じて初めて本当に霊肉の争いが始まるという点から言えば，信仰の実存そのものに命令法の基礎はあると言えよう。ローマにしろ，コリントにしろ，そこの信者達の多くはパウロ自身のレベルの信仰にまで至ってはいない。そういう人々を相手に伝道しているので命令的に言っているところ（e. g. Röm 6 : 19）もあるであろう。しかし命令的に言わざるをえないという事実は，真実には直説法の方も実は不十分たることを示しているのである。直説法が真に達成されていれば，命令法的言い方は不要でもあろう。かくて命令法の存在は直説法の不在を示す。逆に前者の不在は後者の存在を示す。後の方の状況では，命令法がただ不在なのではなくて，すでに直説法と同時に実現されているので，つまりすでに存在しているのであえて改めて言う必要がないということである。かくて直説法，命令法の妥当性という点から言えば双方共に実現されているか，或は実現が共になされていないかのいずれかである。

そしてこのような事態の背景には，罪から恵みの支配への変化が救済史的に生じているという事柄がある。Röm 6 : 11〜14，或は6 : 1〜14 の段落の終りに 5 : 21 の考えにパウロは戻る，即ちイエス・キリストの出来事によってこのような変化が生じたのである[2]。しかもV.14では κυριεύσει と未来形で書かれており，先のことまで見通されているのである。つまり Röm 5 : 21, 6 : 2, 6 f, 11 によると，罪の支配は過去のものであり，すでに克服され，罪の要求は停止させられているのである。そしてこのような前提に基づいて Röm 6 : 12 においてすでに罪に対して死んでいるのだから，そのからだを情欲に従わすことをするなと戒めているのである。つまり直説法に基づいて命令法が言われているのである。直説法には自我の崩壊が前提だが，ここでは命令法はもはや命令法ではない命令法となっているとも言えよう。「愛は律法を完成するものである」（Röm13 : 10）とパウロは言うが，このことはこういう意味でもあろう。思うに自己が無なので直説法と命令法とのいわば矛盾したものが，双方共に一人の人の自己の内に宿りうるのである。自己がもし何かの内容をもっている存在であれば，必らずそれと矛盾したものが存在することになり，それをうけ入れることはできぬことになってしまうであろう。直説法になる時には直説法になり切り，命令法になる時には命令法になり切るのである。直説法も命令法も，それを発する真の主体は共にキリストである。しかもこのキリストは人の内にいわば受肉しているのである。したがって直説法，命令法を実行するのはそれらを発した当のキリストであることになる。そこで以上の如きことになるのである。また人が無であるこ

とは次の点にもでている。Phil 2 : 12f に関して行ないは神と人との間に分割されず，二つの句が互いに補い合っている[3]。つまり V.12 では人の働きとして書き，それが即ち V.13 では神の働きとされている。人の働き，即ち神の働きとされている。このことは人の自我が失なわれ，神から離れた主体としての人の自我はないことをまず示している。もしそういうものが残っていれば，人と神とは別々のものであり，即というわけにはゆかないであろう。creatio ex nihilo として神の働きは働きとして人に及びうるのである。「その願いをおこさせる」(V.13) と言うが，人が無になっていないと願いをおこさしめえぬであろう。「主の霊のあるところには，自由がある」(2 Kor 3 : 17) と言われているが，人が無になっていないところでそういう願いをおこさせようとすると人の自由は失なわれることになるであろう。人の自由と神による願いとは二律背反とならざるをえないのである。仮に自由が実現してもそれは真の自由でないことは言うまでもないことである。

ところで，直説法と命令法との並立においては相互に矛盾するにも拘らず相互に関連する証言の結合が表わされているという考え[4]もあろうが，人とこの世との相互的死ということを前提にして考えれば，直説法と命令法とは相互に矛盾はしないと思われる。相互的死ということは義認ということにとっての不可欠のモメントである。それなしには神による義の宣言をうけ入れることは真には不可能だからである。したがって根源的には直説法と命令法とは矛盾はしない。命令法が存するためには，直説法がなければならない。双方は同時に存在しているのである。丁度この世と自分とが相互に死んでいるがごとくに。例えば「自分の救いの達成に努めなさい」(Phil 2 : 12) とパウロは言っているが，この言葉が命令法として聞こえてくるのはこの世への死が実現していないからだと思われる。命令法ではない如き命令法として聞こえてくるべきものである。この世に対して死んでいない部分があると，その部分に対して命令法が命令法として聞こえてくるのである。それでいてしかも命令法を実現するのは却ってむつかしいのである。ローマ書にしろ，コリント前書にしろ，そこの教会の人々がこの世に対して死んでいないので，命令法の如き言い方をせねばならなかったのであろう。この世への死という直説法が実現していれば，命令法的言い方は不要であったであろう。当時の信者の未熟さは例えば Röm 3 ～ 5 において義認の証言という直説法がでていて，Röm 6 : 1 ff で倫理的な生き方が勧められているという命令法がでていることにも現われている。命令法は直説法との関連で意味をもつにしても，ローマのキリスト者がこの世に対して死んでいれば，こういう警告も或は不要であったかもしれないのである。このような，本来そうあるべき直説法と命令法との Mit-und-Ineinander は話しかけること (Zuspruch) と呼び出すこと (Aufruf) とはしばしば内容において一致するとして Gal 3 : 27 と Röm13 : 14，Röm 6 : 2 と Röm 6 : 11f，1 Kor 5 : 6 ff，Gal 5 : 25 等があげられる[5]点にも反映していると思われるのである。

さて，Phil 1 : 27，1 Kor 9 : 24ff，Röm 6 等においてパウロはキリスト者に対してある一定の倫理的生活態度を要求しているが，このような点について。キリスト者の従順

を新しい生命の“自発的”な表現とは考えず，かくてパウロの勧告はそれなしでは信仰が神への従順ということを失なう如き慎重な応答を信者に求めているとする考え[6]も理解できるのではあるが，だからといって反対に余りにもそういう勧告が重荷として禁欲的に聞こえてくるのでもいけない。自発的ではないとも言えようが，逆にそうだとも考えうる。新しい生命の領域に移されたキリスト者としては自発的とも言いうる。厳密には“キリスト”発的である。“キリスト－自”発的なのである。かくて自発的であると同時に慎重な応答でもあるのである。さもなければそういう生活態度は続かないであろう。そしてまたそういうところより Röm 7 : 25b の如き告白も生まれてくるものと思われる。重荷ということはあってもただ重くはない。「今からは妻のある者はないもののように」（1 Kor 7 : 29）と言われているが，このことは重荷についても言える。重いけれども重くないもののようにということである。さもなければ現実にそういうことを実行できないであろう。仮に実行できたとしても，そのことを神の前に誇るという如き性格をもったものになってしまうであろう。神の倫理的命令が聞き入れられるところでは従う力もまた受け取られていることは Phil 2 : 12fが示している[7]。このように人の信仰に関することは全て神の意志によって始まっていることが分る。ピリピ書のこの個所で言っているように言いうるところまで，彼の自己はいわば無化されているのである。

ところで，命令法は直説法に基づくというのではなくて，むしろ後者の不可欠的構成部分であり，かくて命令法は直説法が可能性として与えたことを実現する局面を表わしているという考え[8]も存している。しかし構成部分として見られることと結果である，基づくということを必らずしも二者択一的に見ずともよいであろう。構成部分として見られているということは神の目から見てということであり，結果であることは人の現実においてであるということであろう。一回的出来事としての霊の領域へ移されることを考える時には，このようになるであろう。またただ可能性として与えたということでは不十分であろう。たしかにそういうものにちがいないとしても，もっと現実性へと近づいているものを与えたと考えるべきであろう。霊と力とが同一的に見られたり，霊のあるところに自由があるという考えを見ているとそのように思わざるをえないのである。Gal 5 : 25 において霊をすでに受けた者に霊において歩むように言っている点からみても，やはり直説法が命令法の基礎となっている。救いは義認された者の倫理的要求の基礎であり，命令法の意味は救いの自己化においてではなくて，救いの結果の維持においてみたされると考える[9]方が即事的であろう。先の可能性を現実化するようにという考えは救いの自己化という印象を与えはしないかと懸命される。たしかに Gal 5 : 25, Röm 6 : 17, 19b, 1 Kor 5 : 7 等ではこのような事柄に関して同じ事が直説法と命令法との双方で表現されている。1 Kor 5 : 7 では明白である。救いがすでに生起したことを一方で言い，他方で現実にそうなれと勧めている。このことはしかし先述の如く，ガラテヤ，ローマ，コリントいずれもそこのキリスト者――パウロ自身の信仰のレベルにまでは至っていない――に対しての対機説

法という性格をもつことをも忘れてはならないであろう。いずれにせよこのような命令法はまた終末までの間の時を，主の再臨まで世にあって耐えること，従順，霊の働きへの一致の時として受け取ることと関連している[10]のである。

## (三)

自我の崩壊によって開示された霊の立場では，自分の十字架を負ってキリストに従うことは自己の在り方をキリストに近づけることであり，根源的には自利的行ないでもある。と同時に十字架を負って他の人を利する行為をすることは利他の行でもある。かくて霊の立場にあっては，自利の行為は同時に即利他の行為でもある。キリスト信仰の倫理はこのような性格をもつであろう。そこで Röm13：8が示す如く愛することに関しては人は常に借りがあることにもなるであろう。神，キリストへの従順は他の人々への奉仕のうちにあることを意味している。

さて，「兄弟をゆるさないならば，わたしの天の父もまたあなたがたに対して，そのようになさるであろう」(Mt18：35)。このように全てのことは結局神，キリストと自己との関係へと収斂してくる。このようになった時には，他の全てのことはいわば無の中に沈んでしまっているのである。だからこのキリストと自分との関係が生きてくる。否その時初めて生まれてくるのである。このようなキリストとの関係の中に自分が生きていることにおいていずれは「その時には，顔と顔とを合わせて，見るであろう」(1 Kor13：12)という考えも生まれてきていると言えよう。キリストと自己との間にあって両者をさえぎっているものは消えた。かくてキリストと自己とは何のさまたげるものもなく相まみえるのである。そういうことの一環として終末での相まみえることも存している。この世に対して死に，心がこの世のことに囚われなくなれば，こういう事態がますます明らかになってくる。人格主義的観点からは無意味とも思われる無限に広がる宇宙などはあってもなくても，広くても狭くても，キリストと自己との関係には無関係のことである。天に昇ったとはいえ，今も自己のそばに，内に存しているのである。キリストが世に下り，昇天した如く，キリスト者はむしろ逆に天に昇って世に下ってきているとも言えよう。天と世とをいわば循環しているとも言えよう。逆に言うと，天と世とが人の心の内を循環しているとも言えよう。イエスへのキリスト信仰，これはこの世からの自由を意味するが，この自由がキリスト者において倫理という形で現象してきていると言えよう。自由が徳という形をとってきているのである。パウロも自由ということを言うのと同時に，また徳目として柔和，自制，寛容等を挙げているのである。このように根本的には世からの自由と徳とは一体である。

ところで，律法は行為者としてのクリスチャンが満たすのではなくて，信者の生命の内に愛として働いている神の力によって成就される[11]。かくてこそパウロは律法への従順について語るのをさける，つまり律法は人が行なうものであり，このことは従順というもの

を人の全生命を神に明け渡すこととの関連で考えていることに比べてはるかにレベルの低いことだからである[12]。こういう点からみると，Röm 6 : 17b は多分注解として扱われるべきだとされる[13]。つまり教えの基準に心から服従という表現，考え方はパウロ的でないとされるのである。彼にとって服従とは全生命を神に委ねることだからである。単に基準に服従ということではないとの意である。この点はまた神の意志はその都度人に知らされることであるから，常に人は祈りつつそれを探求すべきであって律法の如きものとして事前に予め知らされていないという考えとも合致するのである。同様に 1 Kor 7 : 19 で神の戒めを守ることについて語ることは意味深い[14]。律法の戒めではなくて，神の戒めである点が大切なのである。

次に，Röm 6 : 19 での εἰς ἁγιασμόν に関連して，神がキリストにおける救いの業によって“新しい生活”の倫理的描写の創始者でもあるとされる[15]。尤もこういうことが真に有効であるためにはキリスト者がこの世に対して死んでいることが不可欠であろう。このように神が創始者なればこそ敵を愛せよ（Mt 5 : 44）ということもおこりうると言えよう。キリスト者は世に属さないのに世に生きている。そこで世からは排斥される定めにある。そういう排斥をする人々が敵にあたる。信仰的には人はキリストに属すか，或は世に属すかのどちらかである。そこで世に属しキリスト者の敵となる如き人々を愛しうるのでなくてはキリストの福音は世の中へと侵透しない。自分を排斥した人々に対して怨みも辛みもなく白紙の心で接しえて初めて霊の人と言えよう。自分に対して好意的な人には誰しも愛をもって報いることができる。問題はそうでない人々に対してどのように対処するかである。ここのところで霊の人と肉の人との違いが現われてくる。こういう意味では愛敵の教えは正にキリスト信仰的と言えよう。Röm 5 : 10 での「わたしたちが敵であった時でさえ」における「敵であった時でさえ」という表現にパウロの神への信仰の深さを伺い知ることができる。正に“汝の敵を愛せよ”を地でいっている神の愛を表わしているのである。5 : 1 での「神に対して平和をえている」ということとも呼応している，否それを更に深くほり下げているとも言えよう。

更に，パウロは命令法に関連して御霊の実（Gal 5 : 22），義の実に満たされる（Phil 1 : 11），きよきに至る実（Röm 6 : 22）等でも分るように，いわば包括的表現をしている。つまり律法の個々の個条をみたすようにという如き表現をしていない。このことは，救いの維持が命令法で言われているという考えとも呼応していることであると思われる。このように個々の個条を人間が自分の努力によってみたす如き考えをしないことは次のことに通じている。即ちキリスト者の霊による生活というもの，その神への従順が，救いの究極的あり方と同様に，神の業の内に限界づけられており，したがってキリスト者の新しい生活の完成は神による救いの業の完遂の契機として考えられている[16]ことに通ずる。そしてこのような神の業が人において完成されてゆくには，無からの創造が人において始まらなくてはいけない。そのためには人は無でなくてはいけない。からだが聖霊の宮（1 K-

or 6 : 19）となるには，人間的，人間主義的なものは全て除去されていなくてはいけない。ここで初めて神の側からの霊と人の側からの決断というものとが，啐啄一如とも言うべき関係になるのである。律法遵守によっても不安のある時，業による敬虔の時――これらは双方共に，現象的には反対であるが，実は人間主義という点で一致――のいずれにも陥らぬためには世と自己との相互的死が不可欠である。聖化ということは，かくてパウロにとっては神による救いの業の力の証明として問題とされることになる（I Thess 4 : 3～7，5 : 23，1 Kor 6 : 11，7 : 34，Gal 5 : 13～26，Röm 6 : 12～23，12 : 1～2等で分る）。命令法は人という点に視点をおいてのことである。このことは神の業という視点からは救済史的な聖化ということを意味している。かくて人にとっては命令法ということであるが，その内実は神がイニシアティブをとっているのである。神の霊の働き，力によってきよきに至るとの意である。

**注**

1) K. Kertelge : ≫Rechtfertigung≪ bei Paulus 1971 s. 255
2) ibid. s. 268
3) G. Bornkamm : Paulus 1987 s. 208
4) K. Kertelge : ibid. s. 257
5) G. Bornkamm : ibid. s. 208f
6) v. P. Furnish : Theology and Ethics in Paul 1982 s. 227
7) ibid. s. 238f
8) ibid. s. 225
9) K. Kertelge : ibid. s. 258
10) ibid. s. 256f
11) v. P. Furnish : ibid. s. 200
12) ibid. s. 191
13) ibid. s. 197f
14) ibid. s. 202
15) K. Kertelge : ibid. s. 273
16) ibid. s. 257

# Der Indikativ und der Imperativ in der christlichen Ethik

Kaoru NAGITA
*Faculty of Liberal Arts and Science*
*Okayama University of Science*
*Ridai-Cho 1-1, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1990)

Nach Paulus kam seine Rettung im Leben für den Herrn Jesus zustade. Die Bekehrung bedeutet, daß die Augen eines Menschen von dem eigenen Sein dem Herrn zugewandt werden. Daher daß sowohl Leben als auch Tod für den Herrn sind. In betreff der Ethik ist das Problem der Leiblichkeit des Menschen bedeutend. Weil der Mensch Leib hat, kann er nicht anders als wie im Römerbrief 7 seine Schuld gestehen, obwohl er bekehrt hat. Die Welt versucht den Menschen in verschiedenen Weisen, solange er das geistliche Leib nicht bekommt. Der Indikativ bedeutet, daß der Christ durch die Taufe Mitglied des Leibs Christi geworden ist. Auf diesem Indikativ beruht der Imperativ, der dem Christen befehlt, sich für seine eigene Rettung zu bemühen. Der Indikativ und der Imperativ bestehen gleichzeitig. Es ist die unentbehrliche Bedingung, daß der Christ gegenüber der irdischem Welt tot ist.